

その背中に何を見るか

(ピリピン・一七〇二)

「背中で語る」といえば思い浮かぶのはやはり「健さん」。不器用で寡黙なのは銀幕上のことだけではなく、実生活でもそうだったことはよく知られるところ。そこに男の美学を感じる人は実に多い。しかし「背中で語る」のは男だけの特権ではない。二〇〇八年北京で行われたオリンピック女子サッカーの三位決定戦、なでしこジャパンのロッカールームでそれは起こった。自分の思いを吐露する選手たちの中、「苦しいのはみんな一緒。苦しくなったら私の背中を見て走って」と言ったのは澤穂希選手。本人は「覚えていない」この一言は先のW杯の主将宮間選手に引き継がれ、「なでしこ」のDNAとなつていく。

閑話休題。使徒パウロも又背中で語る人間であった。彼はここで大胆にも「私を見習う者になれ」と命じているからだ。しかしその意味するところは何だろうか。私たちは彼の何をまねればよいのか。以下私たちキリスト者が習うべきパウロの姿について二つのことを学びたい。

一、イエスを追いかける姿勢

まずパウロの姿の中で私たちが真似る必要のないものから考えてみたいのだが、第一の一番に挙げられるのは出自である。第一この種のものとはどんなに羨んでも真似ることなど出来ないから「論外」だ。ではパウロの優れた能力かといえばそれも違う。確かに努力によつて人は能力を開花させることは可能だ。だが人間は十人十色、ある人の能力を鑄型にするようなやり方は不自由極まりない。では性格はどうだろうか。残念ながらそれでもない。確かにパウロは一面においてはすばらしい宣教師であったが、彼の真理を求める激しさという長所は時に辛辣な「口撃」という短所にもなっているからである(参・ピリピ三・二)。では習うべきものは何か。それは前段落に明瞭に描かれているパウロの信仰姿勢だ。キリストに捕えられたものとして、今まで自分が誇りにしていたこの世のものを忘れ去り、来るべき御国において与えられる賞を目指して走る彼の姿勢こそ真似るべきものである。だがこの姿勢の創始者はパウロではない。パウロも又フオロアーなのだ。創始者はそうイエスご自身なのだ。それはパウロ自身が「私がキリストを見ならつていくように、あなたがたも私を見ならつてください(一コリ一・一)」と語っていることに明らかである。

二、人間の終局に対する悲しみと愛

時に私たちキリスト者がパウロに倣うべきものはもう一つある。それはイエスの十字架の敵対者に対する態度である。一九、二〇節においてパウロが断罪しているのは三章前半で出てきた「犬」「悪い働き人」「肉体だけの割礼の者」と呼ばれる者たちだ。彼らはパウロの同胞のユダヤ人であり、キリスト・イエスへの信仰のみで救われるという福音の真髄を理解せず、ピリピ教会のような異邦人キリスト者を差別していたのである。こうした人々に対するパウロの断罪は全く容赦がない。彼らは「敵」であり、その最期は「滅び」だと断罪しているからである。

しかしここで注目したいのはパウロがこの言葉を語りながら泣いているという事実である。言語では「声に出して泣く」という意味もある言葉だ。敵なのだから滅びは喜びではないのか。自分たちの国籍は天にあるのだから、なぜ泣く必要があるのだろうか。その理由は彼が「神はすべての人が救われて真理を知るようになるのを望んでおられる(一テモ二・四)」ことを知っていたからだろう。その神の願いを実現させるためにイエスは来られたのに心頑なな同胞はそれを受け入れない。その姿を見た時、彼の心は千々に乱れ、涙がこぼれたのだ。この涙はまたイエスの

涙と同質であるとも言える。なぜならイエスはエルサレムの滅亡を預言して泣いたからである。つまりこれは愛の発露であり、愛をもつて真理を語った何よりの証左なのだ。そしてその姿勢こそ私たちキリスト者が習うべきものなのである。

* * *

六歳でスケートボードを始めた彼。一四歳でプロに転向後は「クライスト・エア」という大技で一躍スターダムにのし上がった。だが彼は満足できなかった。次から次に新しいものを試した。お決まりのセックス、ドラッグ、ロクンロールの日々。しかし彼を満足させる物にはそこにはなかった。反対にクリスタル・メス(覚せい剤)の魔の手が彼を捕え、遂に二〇世紀最後の年、彼は覚せい剤所持の罪で逮捕された。しかし彼は留置場で生まれ初めて聖書に出会い、その一節に捕えられ、クリスチャンになった。同時にかつての仲間達が彼の早期釈放を願う運動を起し、四年間の服役を終えて出所、今はカリフォルニアで牧師として活躍している。その名をクリスチャン・ホソイという。彼もまたイエスを証し、その素晴らしさを伝えることに人生をかけ、パウロの、そしてイエスにならう者である。友よ、あなたはどうか。